

## 一 軍 人 の 戦 後

—— 岩畔豪雄と京都産業大学 —— (中)

川 合 全 弘

### 目次

1. はじめに
2. 荒木俊馬と岩畔豪雄
3. 東京事務所長としての岩畔豪雄 (以上 50 巻 1・2 号)
4. 世界問題研究所長としての岩畔豪雄
  - 1) 無職の二十年
  - 2) 研究所構想 (以上本号)
  - 3) 二冊の大著
5. おわりに

### 4. 世界問題研究所長としての岩畔豪雄

#### 1) 無職の二十年

岩畔豪雄は、陸軍省調査部長職を最後に、昭和四十年三月に京都産業大学理事に就任するまでのおよそ二十年間を無職で通した。この無職の二十年は、岩畔の言によれば、大戦の省察のために「もっぱら読書と思索とに明け暮れた」<sup>(1)</sup>歳月であった。岩畔は、この間の生活を自著『戦争史論』のあとがきで次のように振り返っている。「第二次世界大戦があのような幕切れで終ると、〔戦争論を書きたいという〕若い頃の意欲がモクモクと頭をもたげ、どうにも制御し切れなくなったので、昭和二十年の暮頃から戦争と平和に関する読書と思索に耽るようになった。このような生活が始まると、戦争や平和を知るためには、それよりも更に広くて深い基礎、つまり哲学、宗教、自然科学、技術、社会科学、文化史等に関する知識をもたなければならないことを痛感するようになった。そこでこれら基礎的知識

---

(1) 岩畔豪雄『科学時代から人間の時代へ』理想社、昭和四十五年、421 頁。

を一応身につけるために十余年を費やし、大約三千余冊の関係書籍を読み終えたばかりでなく、読書のために要した時間の二倍近い時間を思索のために費さざるを得なかった。これがため世間の義理を欠くことも多く、親戚故旧に対しても失礼を重ねたことも少なくなかった。かくて、二十年の歳月が夢のように過ぎた……<sup>(2)</sup>」。本稿は、岩畔自身によるこの説明をまともに受け止め、岩畔が戦後二十年にわたって大戦の孤独な省察に沈潜したことと、京都産業大学の創設に参与し、同大学の世界問題研究所長として活動したこととの内的な関連の検討を課題とする。

とはいえ、一八九七年十月生まれの岩畔は終戦時にはまだ四十七歳であり、それからの二十年間は言わば男の働き盛りにあたる。その壮年期を岩畔がなぜ無職で通したのか、また通せたのかということは、素朴な疑問として残ろう。まして軍人時代の岩畔が数々の機密業務と取り組み、またそれを背景として「謀略の岩畔」との強持での世評を博した事実は、二十年に及ぶこの経歴上の空白と相俟って、戦後における岩畔の活動に関していやが上にも種々の憶測を呼ばざるをえず、ひいては彼が関与した京都産業大学設立の経緯についても憶測を生む一因となったように思われる。そこで世界問題研究所長としての岩畔の活動を論じる前に、無用の憶測を避けるべく、まず本節において、この無職の二十年における岩畔の活動について

---

(2) 岩畔豪雄『戦争史論』恒星社厚生閣、昭和四十二年、あとがき。岩畔のこの言葉を裏付ける友人知己の証言は数多く見られる。例えば、旧部下の草地貞吾は、昭和三十一年末シベリア抑留から帰国して間もなくの頃に、郷友連盟本部でたまたま岩畔と会った折に、岩畔から次のような話を聞かされた、という。「自分は戦後、思うところあって、義理を欠くのは承知の上で、殆ど外界との交渉を絶った。前々からいろいろと考えていたことを纏め、印刷でもして残したい。ためには他に煩いされことなく資料の収集整理や思索に残り少ない生命の時間を使いたいからだ」(草地貞吾「哲人としての岩畔さん」、岩畔伸夫編『追想記』昭和四十五年、53頁)。

(3) 一例を挙げれば、社会党参議院議員の野田哲は、昭和五十一年十月二十九日にロッキード問題に関する参議院の調査特別委員会において、ロッキード問題と結びつけて京都産業大学の設立経緯について質問をし、その中で岩畔が同大学の役員に名前を連ねている事実に言及しつつ、「京都産業大学の設立に当たっては、外国から資金の援助があったのではないか」と発言している。「岩畔におけるアメリカの影」とでも呼ぶべき憶測であろう。参議院会議録情報「第 078 国会ロッキード問題に関する調査特別委員会第 6 号」を参照されたい。

で管見のかぎりで整理を試みることにしたい。

岩畔は、戦後の二十年間たしかに定職に就かなかったものの、世間の交際を断ち切って純然たる読書三昧の暮らしをしていたわけではない。その間における岩畔の活動は、公刊された諸資料からだけでも、ある程度窺い知ることができる。それらから断片的に浮かび上がる岩畔の活動は、概ね、① 研究所設立支援、② 研究会参加、③ 東京裁判での証言、④ アメリカとの関係、⑤ 執筆、⑥ その他、の六つに分類されうる。

#### ① 研究所設立支援

これについては、木戸日記研究会による談話聴取の中で岩畔自身が明かしている。それによると、岩畔は、一九四五年九月二日に帰国後、陸軍省解体までの三カ月足らずの間、陸軍省調査部長職に就いた。その頃に岩畔が取り組んだ主な仕事の一つが研究所設立支援である。岩畔は当時の大蔵大臣の渋沢敬三に働きかけ、陸軍第八研究所の土地と施設を借り、外地から引き揚げてくる研究者や技術者の支援に充てた。後にこれが、上篇で触れた民生科学協会の設立へとつながった。<sup>(4)</sup> 岩畔自身がこの研究所の所員となったわけではなく、彼の役割はあくまで研究所設立の企画および関係要素との調整にあった。その意味でこの活動は、かつての昭和通商の設立や中野学校の設置、総力戦研究所の設置促進などと同様に、有能な軍政系軍事官僚としての仕事に属し、恐らくはその最後の一つにあたる。

#### ② 研究会参加

これについては、岩畔の最後の著書『科学時代から人間の時代へ』に

---

(4) 岩畔豪雄『昭和陸軍謀略秘史』日本経済新聞出版社、2015年、259～260頁。岩畔は、これの動機についてこう述べている。「日本が負けたのにはいろいろある、兵隊の中には必ずしも負けない人もおっだろう、ほんとうに負けたのは、約一五〇〇人に及ぶ科学者と技術者と産業人、アメリカのそれらのものに負けたんだらう、だからこれは科学振興を徹底的にやらなければいけないということで、渋沢敬三なんか言って、どうしても大きな研究所を作らなければいけないということを、もうその頃はやっておりました」。同頁。

(5) 拙稿「一軍人の戦後——岩畔豪雄と京都産業大学——（上）」産大法学50巻1・2号、232頁、注32を参照されたい。民生科学協会のホームページによると、財団法人民生科学協会総合研究所としての設立は昭和二十二年であり、初代の理事長は松前重義である。Cf <http://minsei.or.jp/outline/history.html>

「この本を読む人のために」と題する解説文を寄せた旧部下の浅野祐吾が証言を遺している。これは、岩畔が読書と思索の孤独な生活に入る動機の説明ともなっているので、やや長文ながら次に引用する。「戦争に対する深い反省が動機となって、その後再び哲学に対する関心と興味が急速に昂まり、同好の士と相計って哲学の勉強会を開くことになった。この同好の士は秋永月三中将、堀木鎌三前参議院議員、矢部貞治東大教授、武村忠雄慶大教授、平野義太郎氏等であったが、毎週木曜日の夜有名な大学教授などを招いては哲学的な話を聞いては討論した。この勉強会は二十回続いたが、これらを通じて著者〔岩畔を指す——引用者〕は当時の日本の哲学の貧困を痛感し『日本は哲学の分野においても敗れるべくして敗れたのではないか』と慨嘆した。そこで著者は発憤して自分自らが哲学を建設しなければならないと決意し、これが爾来二十数年の哲学生活に入る契機となったと言われている<sup>(6)</sup>」。浅野の説明から推測すると、この勉強会が開かれたのは、岩畔が調査部長職に就いて以降の、ひょっとしたらそれを辞してまもなくの、数カ月の期間であると思われるが、その詳細は不明である<sup>(7)</sup>。しかし少なくとも浅野のこの説明から読み取りうることは、この勉強会を契機として、敗戦からの日本の復興が難事であることを自覚した岩畔が、そのために哲学的な次元から大戦の徹底的な省察を遂行することを自己自

---

(6) 浅野祐吾「この本を読む人のために」、岩畔『科学時代から人間の時代へ』、417～418頁。

(7) 松谷誠関係資料や矢部貞治日記を基にした大谷伸治氏の研究を参照すると、この勉強会は、開かれた時期や出席者の顔ぶれから見て、岩畔の旧部下で戦争指導班長や鈴木貴太郎首相秘書官などを務めた松谷誠陸軍大佐が自ら組織したプレーングループの研究会の一つと重なるように思われる。大谷氏は、矢部日記に基づいて、これを仮に「団子坂研究会」と名付け、第一回（一九四五年十月十九日開催）から第十四回（一九四六年三月二日開催）までの開催の日時と場所、出席者、議題などを一覧表にまとめた上で、この研究会に岩畔、松谷、堀場一雄、塚本誠の旧陸軍省調査部の面々が参加し、またそこで矢部の手になる「新日本建設綱領」が報告されていることから、この研究会が、新憲法案を準備するための「旧陸軍省調査部をあげての活動」であった、と推測している。ちなみにこの研究会には、浅野が上記解説文に挙げた面々が全て加わった他、高坂正顕、西谷啓治、務台理作、東畑精一、城戸幡太郎などの学者が回代わりで招かれている。大谷伸治「松谷誠陸軍大佐グループの活動——新憲法を先取りした「団子坂研究会」——」、『日本歴史』815号、吉川弘文館、二〇一六年四月、55～64頁を参照されたい。

身の終生の課題と思い定めるに至ったこと、これである。

### ③ 東京裁判での証言

管見では、岩畔は、極東国際軍事裁判所に、昭和二十二年四月五日と七月二日との二度、宣誓供述書を提出し<sup>(8)</sup>、昭和二十二年十一月五日と十一月十二日との二度、弁護側の証人として出廷している<sup>(9)</sup>。四月五日付けの宣誓供述書は十一月五日の証言に先立って一部朗読され、七月二日付けの宣誓供述書は十一月十二日の証言に先立って朗読された。十一月五日の証言は主として元首相の小磯国昭被告に関わり、十一月十二日の証言は元軍務局長の武藤章被告に関わる。いずれも整備局長や軍務局長などとしてかつて岩畔の上官の地位にあった人物である。

なおこれらに加えて、岩畔はインドの戦争犯罪人裁判に証人としての出廷を要求されたことがある<sup>(10)</sup>。しかしある研究によると、岩畔は、「アメリカ側の要請で支障があり」、結局、この証人喚問を免れている<sup>(11)</sup>。

### ④ アメリカとの関係

本節冒頭で言及した、戦後における岩畔の活動に関する憶測の多くは、この点、つまり岩畔とアメリカ——とりわけその情報機関——との関係に関わる。というのも、岩畔が、旧陸軍において軍機保護法の改正や、いわゆる謀略課として知られる参謀本部第二部第八課の設置業務などを皮切りに、諜報・防諜・謀略分野の専門家として名を馳せ、かつまた開戦直前に日米開戦回避交渉に従事した——米側に好印象を与えうる——経歴を有することから、戦後、岩畔がアメリカ情報機関との間に秘密の交渉を持ったのではないか、彼の経歴の空白はそれに由来するのではないか、

---

(8) 法廷証番号 3387：岩畔豪雄宣誓供述書（弁護側文書番号：2567）、および法廷証番号 3442：岩畔豪雄宣誓供述書（弁護側文書番号：2589）。

(9) 新田満夫編『極東国際軍事裁判速記録』第七巻、雄松堂書店、昭和四十三年、402～403頁、および477～480頁。

(10) 読売新聞によると、連合国総司令部は、東南アジア軍総司令部の要求に基づき、岩畔を含む六名が、ニューデリーで開かれるインド国民軍戦争犯罪人裁判に証人として出席できるように準備を整えるべき旨の指令を一九四五年十一月六日付けて出している。『読売新聞』一九四五年十一月八日、朝刊2頁。

(11) 岩井忠熊『陸軍・秘密情報機関の男』新日本出版社、2005年、161頁。

という憶測が生まれたのは、ある意味で自然な成り行きでもあったからである。<sup>(12)</sup>

近年、米国国立公文書館資料の機密解除が進み、またそれに伴って、占領期から独立後にかけての、日本の旧軍人や政治家と G-2（連合国軍総司令部参謀第二部）や CIA（米中央情報局）などとの交渉に関する研究が大幅に進展した。これらの資料や研究の中には岩畔に触れる記述も散見するものの、アメリカとの関係において岩畔が——自らの経歴を空白にし

---

(12) 前項で言及した岩井忠熊氏の研究は、その代表的な事例である。氏の研究は、氏の義兄にあたる香川義雄陸軍大佐を対象とするものであるが、その香川が兄事した先輩が岩畔であった。香川は、岩畔の指示に従い、満州国での対ソ諜報活動に始まり、特務機関「山」の創設を経て、インド独立運動工作に至る、秘密情報機関員の途を歩んだ。氏は、香川が遺した証言や資料に基づいて、戦後の岩畔の活動を推測している。それによれば、岩畔は戦後に旧陸軍と米軍との秘密の連絡役、しかもその「要」の役割を担い、それが岩畔の経歴に空白をもたらした。氏のこの推測は、本文に挙げた一般的な理由に加えて、とりわけ香川本人に関わる次の二つの事実に関する氏なりの解釈に基づく。すなわち、第一に、岩畔が——当時、証人の一人としてニューデリーにやって来た沢田廉三元駐ビルマ大使から香川自身が聞いたところによると——「アメリカ側の要請で支障があり」、インド国民軍戦争犯罪人裁判での証人喚問を免れたこと、第二に、一九五七年に香川が米軍との契約により第一物産社員としての肩書で旧特務機関員を引き連れてラオスのビエンチャンに赴き、同地に数年滞在したこと、背景にアメリカによるベトナム戦争準備の必要があったことを暗示するこの仕事は、中間に「岩畔の干渉」がなければ到底考えられないこと、これである（岩井、前掲書、169～171 頁。ちなみに香川義雄が一九五七年十二月頃にビエンチャンから北部邦雄に宛てた近況報告の手紙が、『国策』誌に「ラオスの近況」と題して掲載されている。『国策』、昭和三十三年一月、47～48 頁を参照されたい。北部はかつて岩畔機関の主要メンバーであったから、この手紙は、香川のラオス行きがやはり旧岩畔機関の人脈を通じて行われた仕事であったことを示唆するように思われる。しかしながら他方で、もしそれが秘密の重要任務を帯びた仕事であったとするなら、北部が、手紙の公表という、秘密の暴露につながりかねない危険を冒すだろうか、という疑問が生じうる）。岩井氏はこれらの事実に基づいてこう結論している。「謀略＝情報機関の経験が、米軍に利用されなかったはずはないだろう。岩畔はおそらくその『要』の人物として存在した。それが彼の戦後の経歴の『空白』となる。『謀略』はいつでも社会に対して『空白』となる宿命をもっているのだ」（同書、170 頁）。氏が挙げる事実、とりわけ第一の事実は、たしかに岩畔を必要とし、それゆえ岩畔に特別の配慮を与えるアメリカ側の事情の存在を示唆するに足る。しかしながらそうであるからと言って、これらの事実を、アメリカと岩畔との言わば共同の「謀略」のイメージへと膨らませ、それによって岩畔の経歴の空白を説明することにはやはり飛躍があろう。かりに岩畔がアメリカから請け負った、自らの経歴を空白にせざるをえないほどに重大な秘密の任務があったとして、それがはたして何であったのかが解明されない限り、岩井氏の推測はやはり憶測と言わざるを得ない。

てまで——行わなければならなかった秘密の活動を立証するに足るものは、これまでのところ見当たらない<sup>(13)</sup>。

加藤哲郎氏の編集により、最近公開された資料集『CIA ファイル』の中で、管見のかぎり岩畔に関する最もまとまった言及が見られる資料は、「日本の情報機関」と題する一九五一年五月十一日付けの報告書<sup>(14)</sup>である。これが書かれたのは、朝鮮戦争が勃発し、警察予備隊が発足した翌年、対日講和条約の締結を目前に控えて、占領終了後における日本の再軍備が日米の双方において焦眉の問題となっていた時期である。同報告書は、それを念頭に、日本の情報機関の歴史と現状を分析しつつ、再軍備を巡る日本情報機関の諸集団の動向を占ったものと思われる。ちなみに索引と目次と

(13) 豊富な資料に基づく有馬哲夫氏の一連の研究は、旧陸軍関係では、河辺虎四郎中将、宇垣一成大将、有末精三中将、服部卓四郎大佐、辻政信大佐、辰巳栄一中将、下村定大将、岡村寧次大将、土居明夫中将などを対象とし、彼らが、日本再軍備、対共産圏諜報活動、国内情勢調査と治安維持、国共内戦や朝鮮戦争における日本義勇軍派遣、戦史編纂などのために、G-2 や CIA などと密接な交渉を持った事実と彼ら及び米側双方の——ときに一致し、ときに対立する——意図とを詳細に解き明かす労作であり、所々で岩畔の名が挙がる原資料にも言及している（有馬哲夫『大本営参謀は戦後何と戦ったのか』新潮新書、2010 年、同『1949 年の大東亜共栄圏——自主防衛への終わらざる戦い』新潮新書、2014 年、同『CIA と戦後日本——保守合同・北方領土・再軍備』平凡社新書、2010 年、同『児玉誉士夫 巨魁の昭和史』文春新書、2013 年）。しかし有馬氏によれば、戦後、岩畔とその周辺の活動を指す「岩畔機関」なる——戦中にインド独立運動を工作したかつての岩畔機関とは異なる——集団が、宇垣を頭に頂き、河辺を活動の中心とする「宇垣機関—河辺機関」なる集団の周辺に存在したようであるものの、その詳細は明らかでない。氏はこの岩畔機関についてさしあたり次のように結論している。「及川、岩畔機関に関しては、具体的活動についての記載は少なく、これまでに公開された CIA ファイルの中の他の文書にもあまり言及されていない。従って、これらの機関はインテリジェンス活動で G-2 と提携することはあったが、河辺、有末、服部のように合同して継続的に活動したということではないようだ」（有馬『大本営参謀は戦後何と戦ったのか』、47 頁）。

(14) 加藤哲郎編『CIA 日本人ファイル：米国国立公文書館機密解除資料』第 2 巻（服部卓四郎・東久邇稔彦 昭和天皇裕仁・今村均 石井四郎・河辺虎四郎）、現代史料出版、2014 年、64～137 頁。ちなみにこの資料集は『CIA 日本人ファイル』全 12 巻（2014 年刊）と『CIA 日本問題ファイル』全 2 巻（2016 年刊）の二部から成る。前者は「2000 年日本帝国政府情報公開法にもとづき機密解除された戦時・占領期の日本関係資料約 10 万ページの中から、特に注目度の高い、米国中央情報局（CIA）が収集した日本人 31 人の個人ファイルを収録したものである」（加藤哲郎「CIA 日本人ファイル 解説」、『CIA 日本人ファイル』第 1 巻、i 頁）。31 人の個人ファイルの中に岩畔豪雄のものは存在しない。岩畔の名前は他の諸人物の個人ファイルの中に散見する。



に付された一層詳細なタイトル「日本情報機関の諸集団と日本の国家再建——現在と未来」が、内容をよりの確に言い表している。アメリカとの密かな交渉を通じて行われた当時の旧軍人による活動の中で岩畔がどのような位置を占め、またアメリカ側がそれをどう見ていたかの一端を知るために、長文に及ぶ同報告書の中から、河辺虎四郎元陸軍中將を中心に旧軍人による再軍備の動向を論じた箇所、岩畔と密接に関連する部分のみを、以下に抜粋して訳出する。なお文中の（ ）書きは原文のものであるが、〔 〕内の語は訳者が補い、傍点は訳者が付したものである。

河辺は、一九四五年八月に降伏条件を協議するためマニラを訪れた際、日本陸軍と参謀本部を代表した。彼はそれ以来、この降伏条件に従い、日本軍の人員と日本人が <sup>インテリジェンス</sup> 情報問題やその他の事柄について蓄積してきた背景知識とを、米占領軍、とりわけ G-2 のために用立ててきた……。彼は、陸軍の名において自由に行動しうる参謀本部の最後の現職代表として、彼の選抜になる日本人たちの協働を指揮する権威を有している。一九四八年から四九年にかけて「K. A. T. O. 機関」（河辺、有末、田中隆吉、及川源七）として知られた河辺の集団は、主として旧参謀本部の選ばれた高級将校たちと、旧将官級の親しい仲間とから構成されている……。岩畔（中野学校創設者）と影佐禎昭（梅機関）という二人の旧特殊情報専門家、桜井徳太郎、田中隆吉、鎌田銓三〔鎌田銓一の誤りか？〕、及川源七と彼らの集団とは、最も長期にわたって最も密接に河辺と協力してきたことが報告されている……。

GHQ の G-2 のために情報活動と調査とに従事する旧陸軍参謀将官の連合体として、また日本の地下世界における強力でかなりしっかりとした勢力として、多かれ少なかれ河辺虎四郎と有末精三の指導下に他の集団と緩やかに連携しつつ活動する一集団が、一九四八年から一九五〇年頃にかけて存在したことは、ほとんど間違いのないように思われる……。

一九五一年の幕開けは、主要諸集団の性質と目的に決定的な変化を



もたらした。というのも、このときに初めて彼らは自らの本当の目的、すなわち単なる情報作戦や日本情報機関の創設にとどまらず、政治権力の強化と日本の軍備再建とを達成する手段についても前向きに实际的に考えられるようになったからである……。〔J・F・〕ダレス氏の〔予想より〕早い訪日〔一九五一年一月〕は、早期の講和条約への期待、再軍備の見込み、そして講和条約締結後に右派的な政治目標が徐々に達成される可能性を呼び起こした……。

河辺虎四郎は、航空部門出身である事実にもかかわらず、また地下サークルの間で——とりわけ JONAN〔城南か?〕の陸海軍関係者の間で——彼と G-2 との密接な協力関係のゆえに憤慨と猜疑的になっているにもかかわらず、将来の参謀総長ポストの最有力候補である。もし彼が指名されれば、河辺機関のメンバーが新しい陸軍司令部内の上級ポストの多くを占めることになる。特に、復活しつつある諸々の陸軍情報機関全体を指揮するために、河辺は、恐らく岩畔豪雄を参謀次長か第二部長かに就けたいと考えていよう。岩畔の他の資質を考慮してこのトップポストに別の人選をするのでなければ、影佐禎昭か、川本芳太郎か、あるいはその両名が、情報部門の副官となりそうである……。有末精三は、一旦陸軍がアメリカの支配から離れたら、最高ポスト競争から実質的に脱落する。彼が河辺や他の参謀総長の下で再び第二部長に返り咲くチャンスは、右派の間に広がる彼への敵意のゆえに、ほとんどない。岩畔は、その認められた才能と穏健な見解とのゆえに、河辺に代わる、参謀総長候補の「ダークホース」となりうる。しかも彼は、同じ派閥ながら、河辺ほどアメリカと同一視されていらない。言い換えれば、彼は、外国による支配への従属からの決別を示す「顔」となりうるという理由で、河辺の代替候補となりうる。もし彼が総長となっても、副官たちの人選はほぼ同じものとなる。及川源七は、年長であることと JONAN の支持の可能性とのゆえに候補となりうる。しかし彼は河辺よりも敵が多い。最後の陸軍大臣下村定は、吉田茂と親しい関係にあるがゆえに非常に有力な候補である。

しかし彼は、当然ながら河辺や岩畔やあるいは辰巳栄一が副官として採用されるのでなければ、他の将官たちに受け入れられにくい。こうして我々が見るところでは、将来の陸軍の支配権とそれに服属する情報機関とは、恐らく、河辺と結びつく参謀本部将校たちの緩やかに組織された集団の手中にある<sup>(15)</sup>。

周知のように、日本の再軍備は、この報告書がこの時点で予想したような本格的な仕方では進まず、したがって河辺が参謀総長となることも、岩畔がその下で参謀次長となることもなかった<sup>(16)</sup>。それは本稿の関心事でない。本稿にとって重要であることは、この報告書から次の事実がある程度見て取れることである。すなわち、旧将校の中に再軍備などの国家的目的を実現すべく様々な形で密かに米占領軍と接触する者が数多くおり、岩畔もその一人であったように思われること、しかしアメリカとのこの秘められた交渉の主体は河辺虎四郎を中心とする集団、すなわち河辺機関であり、岩畔は——河辺や米側からの評価の高さが窺えるものの——あくまでその協力者にすぎなかったこと、これである。言い換えれば、『CIA ファイル』が明らかにすることは、アメリカと旧日本軍将校との密かな協力関係が占領期に広く見られた現象であり<sup>(17)</sup>、決して岩畔に限られたことであった<sup>(18)</sup>。

---

(15) 同書、92～93 頁、108 頁、111～112 頁、122～124 頁。

(16) 一九五一年四月にマッカーサーがトルーマン大統領によって連合国軍総司令官を解任され、それに伴って日本の再軍備に積極的な G-2 部長のチャールズ・ウィロビー少将が退任すると、最大の後ろ盾を失った河辺機関や服部機関などの再軍備推進派は、尚早の本格的再軍備を望まない吉田茂首相の反攻の前に、次第に力を失っていった。有馬『大本営参謀は戦後何と戦ったのか』第三章、第四章及び『1949 年の大東亜共栄圏』第七章などを参照されたい。

(17) 岩畔とアメリカとの接触について、この報告書では河辺機関の集団的活動という間接的な形でしか触れられていないが、「再軍備——G-2 と接触する旧陸軍将校たち」と題した一九五一年五月六日付けの別の報告書では、下村定、有末精三、河辺虎四郎、鎌田銓一などの常連メンバーの他に、ウィロビー G-2 部長と「不定期に接触するその他の人物」として岩畔の名前が特筆されている。加藤哲郎編『CIA 日本人ファイル』第 2 巻、51～52 頁を参照されたい。

(18) 上記の一九五一年五月十一日付けと五月六日付けの報告書は、河辺機関の他に、日米の戦史編纂と日本の再軍備計画とを接点に G-2 と協力した、服部卓四郎元陸軍大佐を中心と

わけではないこと、これである。それどころか、引用文中の傍点を付した文章が示唆するように、岩畔とアメリカとの関係は、河辺や有末と比べれば、むしろはるかに距離を置いたものであったように思われる。

こうして、岩畔とアメリカとの関係を特別視し、戦後における岩畔の「無職の二十年」の理由をもっぱらそれに帰することは、憶断にほかならない、と言いうる。本稿でこの問題にいささか立ち入ったのは、「岩畔におけるアメリカの影」を仮想するこの憶測の肥大化が、「無職の二十年」の理由を岩畔自身の動機に即して内在的に理解することを妨げる要因となってきたように思われるからである。他の旧将校と同様に、岩畔も、戦後、日本の国家再建をめぐる眼前の実践的な諸課題に発言することがあったであろうし、様々な理由から旧軍人集団や米占領軍と交渉を持つこともあったであろう。本節の①から⑥は、憶測を通じてそれらの意味が過大視され、その結果、大戦の哲学的省察という岩畔本来の仕事の意味が看過されることを防ぐための、前もっての整理にほかならない。

#### ⑤ 執筆活動

岩畔が「無職の二十年」の間に行った執筆活動の全貌は、残念ながら不明である。筆者が入手したかぎりでまとめるならば、それらは、ア) 戦史室からの依頼に応じて提出した論文三篇<sup>(20)</sup>、イ) 雑誌に寄稿した論文三

---

ㄨ する集団（服部機関）にも諸所で言及している。ちなみに服部機関には岩畔と近い西浦進や堀場一雄が主要メンバーとして加わっているが、両報告書には、この集団との関連で岩畔の名前は全く挙がっていない。服部の再軍備計画を対象とした次の研究でも、服部機関への岩畔の関与は全く論及されていない。阿羅健一『秘録・日本国防軍クーデター計画』講談社、二〇一三年。かつてノモンハン事件と日米開戦とに際して存在した、岩畔と服部の立場の鋭い対立を念頭に置くならば、戦後の服部機関に対する岩畔の非協力は不思議でない。

(19) 引用文からも窺われるが、かつての参謀本部第二部長有末精三は、ウィロビーとの関係が親密でありすぎたために、日本の旧将校の間で評判がきわめて悪かった。たとえば次を参照されたい。有馬『大本営参謀は戦後何と戦ったのか』、70 頁。

(20) 「近衛第二次内閣国策決定の経緯と三国同盟成立当時の陸軍の立場」（防衛研究所戦史研究センター史料閲覧室、文庫－委託－107、昭和三十二年十二月）、「私が参加した日米交渉」（同、文庫－委託－638、昭和三十一年二月）、「人間性の限界を体験して」（同、南西－ビルマー596）。

(21) 篇、ウ) シンガポール攻略戦における近衛歩兵第五連隊の戦記をまとめた  
本一冊、(22) エ) 日本国策研究会の機関誌『国策』に寄稿した論文十四篇、<sup>(23)</sup>  
オ) 第二十八軍の戦友会の機関誌『南窓』に寄稿し、後に岩畔の追悼論集  
に再録された論文二篇<sup>(24)</sup>の、合計で二十二篇と一冊である。これらを通観し  
て分かることは、執筆の主題が、前半期における戦史や国内外の情勢論か  
ら、後半期における哲学的文明論へと徐々に変化していることである。

## ⑥ その他

その他の主な活動として挙げられるものは、戦友会活動（第二十八軍の

---

(21) 「軍人の見た極東情勢」、『ダイヤモンド』昭和二十八年三月十一日号、「準備されていた秘密戦」および「岩畔機関始末記」、『週刊読売』、昭和三十一年十二月八日。

(22) 『シンガポール総攻撃』潮書房、昭和三十一年九月。これは新たに刊行されている。『シンガポール総攻撃——近衛歩兵第五連隊電撃戦記』光人社 NF 文庫、二〇〇〇年。あとがきによると、この書は、連隊長の岩畔が「妹尾考泰中尉に命じて書かせたものを母胎にして生まれた」という。岩畔は、妹尾が持参した草稿を、後の悲慘なビルマ作戦の中でも「終始肌身はなさず」持ち歩いた（同書、207～208 頁）。この書にせよ、第二十八軍の戦友会による岩畔追悼録『軍参謀長岩畔豪雄』（後掲註 24 参照）にせよ、部隊指揮官としての岩畔を物語る書は、読む者に部隊将兵と岩畔との強い絆を彷彿させる。本書の草稿執筆者である妹尾中尉が後に記した岩畔追悼文は、短文ながら、この絆を鮮やかに表現して美しい。妹尾考泰「追悼記」、岩畔伸夫編『追想記』、32～33 頁を参照されたい。

(23) 「世界情勢と国内動向」（一九五四年十二月）、「四つの眼」（一九五六年四月）、「エネルギーの世界観」（一九五六年五月）、「国策決定の条件」（一九五六年六月）、「エネルギーの世界観から見た生命」（一九五六年六月）、「精神作用とエネルギー」（一九五六年九月）、「エネルギーと仕事」（一九五六年十月）、「因果律」（一九五六年十一月）、「現代の矛盾」（一九五七年六月）、「歴史と数」（一九五七年九月）、「歴史と時間」（一九五八年二月）、「労働観の変遷と労働の本質」（一九五八年五月）、「進化する人間観」（一九五八年六月）、「物質界の変化と速度」（一九五八年十二月）。日本国策研究会は、京都在住の中川裕が主催した会であり、岩畔の戦友の北部邦雄がその運営に携わっていた縁で、岩畔もその機関紙『国策』に寄稿するようになった、という。次を参照されたい。岩畔婦美子「幸せだった夫・豪雄」、岩畔伸夫編『追想記』、61 頁。ちなみに荒木俊馬も昭和三十一年頃から『国策』誌に登場する常連となっている。おそらくこの日本国策研究会が、京都産業大学設立へと続く荒木と岩畔の盟友関係を育んだ母胎の一つであったように思われる。

(24) 「年頭の辞」（一九六二年一月）、「平和の瑞祥」（一九六四年一月）。いずれも土屋英一編『軍参謀長岩畔豪雄』岩畔参謀長追悼録編集委員会、昭和四十七年、に再録された。「心の世界帝国」を樹立すべき、敗戦国日本の世界史的使命を論じた前者は、後の京都産業大学世界問題研究所設立へと至る岩畔の問題意識を簡潔に表明しているように思われる点で、興味深い。同書、148～151 頁を参照されたい。

シッタン会<sup>(25)</sup>、日本郷友連盟理事、歩兵第十六連隊の歩一六会<sup>(26)</sup>、近衛歩兵第五連隊の近歩五会<sup>(27)</sup>など)、選挙活動支援<sup>(28)</sup>、ラジオ番組出演<sup>(29)</sup>、中国訪問<sup>(30)</sup>などである。

以上、①から⑥まで見たように、戦後、岩畔はけっして孤絶した思索の生活に籠ったわけではなく、たしかに世間と多種多様な交渉を持ちはした。しかしながら総じてそれらは、本稿の視点から見れば、岩畔が――

(25) 第二十八軍は昭和十九年一月に桜井省三中将を司令官、岩畔を参謀長としてビルマ方面軍の隷下に編成された軍である。岩畔は、戦争末期に無謀なインパール作戦の失敗のあおりを受けてまことに悲惨な退却戦を戦った第二十八軍の経験者、後にこう回顧した。「長期に亘り生死すれすれの線を彷徨した我々の先頭部隊が友軍の戦線に帰り着いたのは終戦二日前の八月十三日であった。前後百余日の作戦行動を無事に切り抜けた者は約半分に当る一万五千余名で、残り半分はシッタン平地の鬼と化したのであるが、この作戦位「人間性の限界」を痛感させられ、今尚割り切れない心のしこりを残している事柄は私の三十年に及ぶ軍歴中一度もなかった」（上掲「人間性の限界を体験して」、8頁）。桜井司令官は、岩畔追悼論集の巻頭で、第二十八軍の「玉砕潰滅」を防いだ功績を岩畔に帰する旨の言葉を述べている（土屋編『軍参謀長岩畔豪雄』、2頁）が、実際に岩畔が敗北を予期して予め入念な退却計画を立てて臨んだこの作戦は、いかに絶望的な戦況でも決して玉砕主義を採らない岩畔の冷静であくまで前向きな戦争観を最もよく示しているように思われる。参謀として岩畔に仕えた佐藤徹夫も、「私が第二十八軍に在って作戦の上で最も心をうたれたことは第二十八軍の作戦上玉砕を避けられ、事実玉砕がなかったことである」、と回顧している（同書、235頁）。追悼論集の編者を務めた土屋英一元参謀によると、第二十八軍の戦友会「シッタン会」は昭和二十六年に発足し、「年に一〜二回会合し」た。岩畔はその都度「読書と思索の日々から得られた世界情勢の分析」をし、「名論卓説」を披露した、という（同書、197頁）。同会の機関誌『南窓』は53号（昭和六十一年七月）まで続き、初期にはおよそ年二回のペースで発行されていたようであるので、岩畔の寄稿文は、前掲註24に挙げた二篇以外にも、かなり存在するのではなかろうか。

(26) 土田兵吾「故岩畔豪雄君の思い出」、岩畔伸夫編『追想記』、36頁を参照のこと。新発田所在の歩兵第十六連隊は岩畔の原隊であり、前掲註12で触れた香川義雄も同じ原隊である。

(27) 近衛歩兵第五聯隊史編集委員会編『近衛歩兵第五聯隊史』下巻、近歩五会発行、平成二年、718〜720頁を参照されたい。

(28) 岩畔は、一九五三年四月に行われた第三回参議院議員選挙に立候補した、旧知の青木一男の選挙参謀長を務めた、という。岩畔『昭和陸軍謀略秘史』、173頁。

(29) 岩畔は、一九五五年三月一日に「新政局下の日本の進路」と題するラジオの座談会番組に「軍事評論家」として出演している。『読売新聞』一九五五年三月八日、夕刊、2頁。

(30) 読売新聞は、久原房之助を団長とし、岩畔を含む全八名が、日中・日ソ国交回復国民会議の派遣により一九五五年八月早々に訪中する予定である、と報じている。『読売新聞』一九五五年七月二十二日、朝刊、2頁。

自己本来の仕事と思い定めたもののために—— 断とうとしてなお断ち切れなかった「世間の義理」<sup>(31)</sup>に属する、と言いうる。

## 2) 研究所構想

さて岩畔が所長職を務めた時期<sup>(32)</sup>の世界問題研究所の実態は、実はほとんど明らかでない。彼が何のために研究所を作り、そこで実際に何をしたのかを記す資料は、今日ほとんど残されていない<sup>(33)</sup>。前稿で述べたようにこれには幾つかの理由が考えられる<sup>(34)</sup>が、その最大のものは、世界問題研究所が荒木俊馬や小野良介などの大学経営陣の意向で大学の東京事務所と表裏一体の組織として設置され、岩畔所長時代の研究所が草創期の大学を発展軌道に乗せるべくもっぱら東京事務所としての活動に力を注いだこと、その結果、研究所としての組織的活動をほとんど行えなかったこと、これである<sup>(35)</sup>。言い換えれば、研究所の初期史が不明であるのは、そもそも研究所がその

---

(31) 岩畔『戦争史論』、あとがき。

(32) 岩畔は、研究所が設立された昭和四十一年四月一日から、亡くなる昭和四十五年十一月二十二日までの間、初代所長を務めた。

(33) 世界問題研究所設置に関する法人理事会の議事録や研究所の設立趣意書は存在しない。今日存在する「趣意書」は若泉所長時代に作成されたものである。『世界問題研究所紀要』の発行は——その前身を含めても——昭和五十二年九月から、『世界問題研究所所報』の発行は昭和六十一年三月からである。当時の研究所の教授会議事録も研究会の記録も見当たらない。

(34) 前掲拙稿、221 頁の註 2 を参照されたい。

(35) 第二代研究所長の若泉敬は、後年、「世界問題研究所について」と題する研究所の紹介記事において、最初期の研究所が事務的活動に忙殺され、組織的な研究活動を十分に行えなかった実状を、こう率直に述べている。「その頃は仕事の内容も、研究活動よりは事務処理に忙殺されることの方が多く、その中でも国際交流や渉外関係には特に力を入れました。とりわけ、総長の指示により、林語堂博士、アーノルド・トインビー博士から始まった一連の国際的大学の本学招聘の実現には事務的な面で全力を挙げました。……その外、地の利を生かした中央での関係官庁等との連絡や、学生の募集そして就職開拓に飛び廻るなど、事務内容はまったく種種雑多なものでした。……附置研究所としての研究活動を本格的に開始したのは、昭和四十七年より三年間にわたって行われた連続共同研究会だったといえましょう」（『京都産業大学報』、昭和五十一年九月二十日、4 頁）。こうして岩畔が、せっかく世界問題研究所を設立しながら、荒木や小野の期待に応える形で東京事務所の仕事に終始せざるをえなかったこともまた、結局「世間の義理」に由るものであった。

実質をいまだ伴っていなかったためである。<sup>(36)</sup>

当時、世界問題研究所は言わば岩畔の頭の中にのみ存在し、その実現を見る前に、岩畔は急逝した。岩畔が研究所をどう構想していたかを知るためのほぼ唯一の資料は、上篇で触れた昭和四十一年四月一日制定の「世界問題研究所規定」<sup>(37)</sup>である。ここではこれを手掛かりとして、岩畔の研究所構想を探ってみたい。

同規定は全十六条と附則とから成る。第四条によれば、研究所は所長と三つの部と庶務課とから編成され、その中、第一部は「社会、政治、経済、軍事、その他世界史的な意義を内包する世界状況」の調査（第七条）、第二部は「人類又は我等の国家社会のために必要且緊急な世界史的対策」の研究（第八条）、第三部は「世界史的意義を内包する文化及び思想の実態」の調査（第九条）を任務とする。このような組織を編成するために、同規定の第十条は、専任所員十名（内五名は教授、教授の内三名は部長）、兼任所員若干名、事務員若干名、嘱託若干名、研究生（学生の志願者）の職員を予定している。

この規定を通観するならば、そこに岩畔独自の構想を示唆する、二つの顕著な特徴が存在することが分かる。一つは、研究所の名称と任務とに関して、戦後の岩畔の思索を特徴づける「世界問題」、「世界史的」、「人類」といった用語が多用されていること、そしてこの「世界問題」の「調査」

(36) 最初期の世界問題研究所の実態が不明である事実は、謀略家としての岩畔の世評や日米沖縄返還交渉における若泉の「密使」活動と関連付けられて、研究所の設立趣旨について様々の憶測を呼んできた。筆者はそれらの信憑性を全く排除するものではないが、しかし確かな証拠が出てこない限り、この事実は、本文で述べたように、さしあたり研究所にその実質が伴っていなかったことの現われと受け取ることが妥当であろう。

(37) 京都産業大学大史編纂室所蔵。

(38) 岩畔が大戦の哲学的省察から導いた結論は、後述するように、科学技術に支配される文明から哲学と宗教を中心とする文明への転換の必然性とならんで、国際連合による諸々の努力の果てに、あるいはひょっとして不幸にも第三次世界大戦という荒療治の果てに、到来する世界連邦の必然性であった。岩畔は、トインビーとの往復書簡において、世界連邦の必然性についてこう述べている。「私の信ずるところによれば、世界（地球表面上の列国）を打って丸とする世界連邦が生まれることは、あらゆる観点から見て必至のように思われる」（岩畔『科学時代から人間の時代へ』、403頁）。



と「対策」のために、発足したばかりの一私立大学としては恐らく異例の大規模な研究組織が構想されていること、これである。岩畔にとって「世界問題」とは、後述するように、国際社会に生じる様々な問題の総称、すなわち国際問題を指すのでなく、むしろ国民国家間の対立を克服して「一丸」<sup>(39)</sup>となった世界をいかに形成すべきかという問題、すなわち課題としての世界を指したのであり、研究所の名称は、岩畔のこの思想を端的に表現するものであった。<sup>(40)</sup>そしてこの巨大な課題を達成するために、研究所は、専任所員だけで十名、総勢で恐らく二十名以上を擁する大規模で充実した組織でなければならなかった。<sup>(41)</sup>

いま一つ認めうる特徴は、「学校法人京都産業大学の管理下に世界問題研究所を設置する」(第一条——傍点は引用者)という、附置研究所としては異例の位置づけ方を採っていること、所長の任期やその任命権者について何ら規定がない反面で、全ての構成員に関して所長の指示、命令の権限を定めていること(第五条～第七条、第十一条、第十二条)、組織と経

---

(39) 同頁。ちなみに岩畔の旧部下で後に京都産業大学理事を務めた石田正美は、「世界問題研究所」の名称に岩畔が込めた並々ならぬ思いについて、次のように述べている。「岩畔先生は、大学創立一年目の四十一年春、世界問題研究所を設立し、自ら所長に就任された。研究所設立は、先生の長い間の宿願であった。国際問題研究所ではなく、世界問題を冠したのは、人類共通の大問題に取り組もうとの広大な構想に基づくものであった」(石田雅巳(正美)「岩畔聯隊長を偲ぶ」、『近衛歩兵第五聯隊史』下巻、670頁)。世界連邦の形成や文明の転換を要請する岩畔の「世界問題」観は、それが国民国家間の死闘に自らの前半生を捧げた人物の手になるものであるだけに、なおさら傾聴に値するものを含んでいるように思われる。

(40) ちなみに、岩畔の逝去に際して若泉が記した追悼文によると、岩畔は、世界問題研究所長就任に際して、「世界之心」と題する漢詩に託して研究所の理想を示した、という。岩畔が言う「世界」の意味を知る上で参考になると思われるので、次にその全訳を掲げる。なお訳文中の「/」は改行を示し、「？」は原文の欠字を示す。「其心を大きくして世界之物を容れる/其心を虚しくして世界之賢を挙げる/其心を労して世界之勢を知る/其心を潜めて世界之理を究める/其心を注いで世界之計を謀る/其心を平らかにして世界之事を論じる/其心を励まして世界之義を行う/其心を正して世界之悪を?/其心を定めて世界之変に応じる/天を敬い人を愛し誓って世界之和を致す」(若泉敬「追悼記」、岩畔伸夫編『追想記』、47～48頁)。

(41) この規模の組織を実現するために、岩畔は大学の経理を一手に預かる小野良介に対して「年間予算五千万円」を要請したが、小野は経営上の判断からそれを二千万円に減額した、という。前掲拙稿、228頁を参照されたい。

費の実際のあり方について「年度毎に定める」（第十六条）として柔軟に規定していること、これである。なるほどこれらの規定の意味は様々に解釈しうる。しかし上篇で見たような、岩畔に対する大学創立者荒木俊馬の信頼の厚さを念頭に置くと、恐らくその主旨は、岩畔を終身所長として想定しつつ、研究所の運営について所長に最大限の裁量を認めることにあったのではないかと推測される。言い換えれば、世界問題研究所は実質的に岩畔が思い通りに運営する、まさに岩畔の研究所として設立され、それが附置研究所であることの意味は、岩畔の研究所を単に学校法人の管理下に置くことにあったにすぎない、と考えられる。

しかしながらこの「研究所規定」に具現された岩畔の構想の壮大さと裏腹に、初期の研究所は、東京事務所としての務めを果たしはしたものの、「研究所規定」に盛り込まれたような規模の組織と本来の活動とを実現することはおろか、紀要や所報の発行といった研究所としてごく当たり前の仕事を行うことさえなかった。岩畔の研究所構想は、実際には、ほとんど彼の内心の夢にとどまった、と言わなければならない。<sup>(42)</sup>

---

(42) その背景には、荒木や小野による東京事務所としての研究所の意義の重視と事務的活動の多忙さに加えて、私立大学の経営面での制約、晩年の岩畔が病気がちであった事実（前掲拙稿、231 頁の註 30 を参照のこと）、唯一の所員若泉における「密使」活動の比重の大きさ、などの諸事情が挙げられよう。こうした事情のために上記の「研究所規定」が事実上空文化したことによって、やがて岩畔の死とともに「研究所規定」の存在そのものが大学関係者の記憶から消し去られた。十年史から四十年史までの京都産業大学正史が、これまで世界問題研究所の設置日として、「昭和四十一年四月一日」という「研究所規定」が定める日付に全く言及せず、むしろ「昭和四十一年五月二十四日」（『本学 10 年の歩み』、『京都産業大学報』第 7 号）や、「昭和四十一年五月十五日」（『二十年の歩み』、『京都産業大学 30 年の歩み』、『京都産業大学 40 年史』）を挙げてきたのは、このためであると思われる。